

## 嘉興大藏經刻印の初期事情

はじめに

所謂嘉興大藏經の刻印事業は、佛教の消滅と機根の劣弱とが重なり合う末法の世を實感させた明末萬曆年間に、廉價で簡便な書冊版大藏經を普及し人々の佛教への理解を擴大深化させようという佛徒達の誓願で始められた。頻發する外憂内患が人々に言い知れぬ不安を醸し出す中、自心を覺醒しさえすれば不可能事などありえないとする當時先鋭の思想とも呼應して、刻藏を發願する人々が登場してきたのである。しかし、その事業は、遅くとも十年以内には完成できるとの豫想とは大きく違つて、事業開始者達の存命中にも完成にはほど遠く、結局、十六世紀末の開始時點から實に百年ほどの歲月を隔てた十七世紀末に至るまで繼續された。その間、士庶貴賤を含めた無數の人々の醜金や楞嚴寺の資金がその財政を支えたのである。刻藏事業がそうした経過をたどつた背景には、社會的、政治的、經濟的など諸原因があるが、發願者達の見解や思惑の違いもそれらの一つに數えられるであろう。ここでは、『刻藏緣起』を手がかりに、發願者達の考え方、とりわけ事業推進の指導者に關する彼等の認識、自覺の食い違いについて、

考察する。

### 一、袁黃（了凡）と幻余法本の發願文

所謂嘉興大藏經の刻印事業を、何時ごろ、誰が、どんな考えで構想したのであろうか。『刻藏緣起』所收の願文や緣起の中で、事業が最初に構想された事情に言及するものに袁黃（了凡）の「刻藏發願文」と比丘法本の「幻余大師發願文」がある。前者には著述年月日の明記がないが、文末に「己丑（一五八九）秋、幻余挾卷至官舍、索余願文書于首」と見えており、著述年時を推測できる。ここに「挾卷」というのは判然としないが、恐らく、各贊同者が著した願文や緣起の卷を携行してという意味であろう。とまれ、萬曆己丑の歳の秋に幻余法本が袁黃を訪れ、卷頭に載せる願文の執筆を依頼したのに應えて、袁黃は「刻藏發願文」を著したようである。後者には、「萬曆十七年己丑（一五八九）冬十月二十四日」と年月日が明示され、季節と月日とからして袁黃（了凡）の「刻藏發願文」を承けてのものであろう。ただし、これらの文章は、いずれも事業推進の火付け役として、この開始に先だち、率先垂範、人々にそれを呼びかけたものではない。實は、

中嶋隆藏

ある範圍の人々が既に事業を開始してから數年を経て、江南から五臺山へと事業の中心地が移されてから後に、ようやく回想的に著されたものである。二者の中、先に著された袁黃（了凡）の「刻藏發願文」の末尾には次のように見える。

萬曆癸酉（一五七三）から自分は幻余禪師とともに武塘の塔院で修禪していたが、時めく俊才や畏友が朝晩に訪れて来て、いつも世儒の説を據り所にして自分たちに疑難の矛先を向けてきた。自分は「皆の發言は混亂しており、聖人達の趣旨を損なっている。佛教が中國に傳入した頃、折悪しく堯・舜・周公・孔子が世を去った後だった。これら聖人が現れない限り、一體誰が調停できよう。傳奕や韓愈等の徒が優越心を抱き淺見を振り回し闇雲に非難し、宋儒がこれを擔いで敷衍するに至ると、後世の學徒を童蒙の時からその説に浸らせ正見を覆い隠してしまい、ために彼らは佛教の廣大な境地を思いやらずに只その教えの虛無であることを疑い、その堅固な教門を覗きもせず、只その教えの寂滅であることを疑うばかりであった。閒々、豪傑で獨立不羈の者一二人が出てくると、彼らは皆佛書を讀誦し佛言を理解した」と思った。そこで自分は幻余と話をし「釋迦は世を去ったが、教えはなお存在している。ただ梵策は重く大きいため流傳がまだ不十分だが、もし書板に變えて刻印し津々浦々に流通させ人々に誦習させれば、どれが邪でどれが正かを誰もが自分で辨別でき、正法が大いに盛んになる」と言った。それから十年が過ぎた萬曆癸未（十一年、一五八三）の歲、達觀大師が汾湖の茅屋に立ち寄りられた折り、また共に相談し「世に大いに利益する」と言った。そして翌萬曆甲申（十二年、一五八四）、密藏師兄に嘉禾の楞嚴寺で出會って一緒に計

嘉興大藏經刻印の初期事情

畫を練り、多少具體案を得た。ただ自分に募緣文を起草せよとのことだったが、吾が師の陸五臺先生に教えを頂くことにした。その後、具區（馮夢禎）、洞觀（瞿汝稷）・健齋（曾乾亨）、宇泰（王肯堂）等の師兄弟達が共に盡力して考えてくれ、募金が大いに集まった。ただ自分は任地の渠陽で手を拱くばかりで一緒に奔走しなかつた。かくて萬曆己丑（十七年、一五八九）の秋に、幻余が卷を携えて官舎にやって来て、卷首に願文を書くように求めた。これは驚きだが、この願いは確かである。（自于萬曆癸酉（元年、一五七三）、余偕幻余禪師、習靜于武塘塔院。時髦勝友、听夕叩門、往往束縛于世儒之說、頻與疑難。予謂、衆言淆亂、折諸聖、佛教入中國、時堯舜周孔已沒、聖人不作、孰與折衷。傳奕韓愈之徒、挾其勝心、騁其淺見、而妄昏之、宋儒遂祖之、而布之訓誥。令後世學者、爲童蒙時、輒已入其說、而蔽其正見。未嘗測其廣大之境、即已疑其虛無。未嘗窺其堅固之門、即已疑其寂滅。間有一二豪傑能卓然自信者、則皆誦其書而知其言者也。因與幻余私議謂、釋迦雖往、法藏猶存、特以梵策重大、流傳未廣。誠得易以書板、梓而行之、使處處流通、人人誦習。孰邪孰正、人自能辨之、而正法將大振矣。逾十季癸未（十一年、一五八三）、達觀大師寄跡于汾湖之敝廬。余復與商確謂、利益甚大。又明季甲申（十二年、一五八四）、遇密藏師兄于嘉禾楞嚴、相與籌畫、頗有次第。即命余草募緣文、而請益于吾師五臺先生。厥後具區・洞觀・健齋・宇泰諸兄弟、相竭力謀之、事遂大集。余則株守渠陽、不得與奔走。己丑（十七年、一五八九）秋、幻余挾卷至官舎、索余願文書于首。此事倘諧、此願不虛發矣。）

遅れて著わされた法本の「幻余大師發願文」も、袁黃の言うところ

をほぼ裏書きしている。

わたくし法本は自ら省みて、「素質が下劣で識習が昏柔だが、幸い宿縁によって佛子となることができ、達觀和尚の導きをも受けて、あらためて泥途に奮い立ち、完全なる悟りがあり、それを修證しなければならぬ」と知った。萬曆癸酉（元年、一五七二）の歲、金陵で雲谷和尚に參禪してから、武塘に戻り、自分が修業している寺院の中に禪室を構えて朝夕修禪誦經していると、折しも項東源と袁了凡の兩居士が日々私のところを過ぎり、法遊の交わりを結び、淺薄なことなどによらず、啓發することが多かった。その智慧と慈悲と方便とは、まさに再來の淨名というべく、私と姿格好は違っても、意氣投合した素晴らしい交わりだった。ある日、了凡居士が来て、私に「梵典を方冊に換えて家々に傳え人々に誦えさせ、邪見の密林から抜き出して一切智の海に歸入させたのが、どうか」と直言した。弘大な誓願を發したものの、實行には及ばず、自分は結局山林に籠もり、居士も亦世網に絡まれて、あつという間に月日が過ぎ、なんとも遺憾である。萬曆丙戌（十四年、一五八六）に、豫章の密藏開兄がこの誓願を胸に燕都で布施を乞った。未來の衆生が苦海に沈没するのを思い、悟りへの渡し場を豫め用意しておこうとしたのだろう。その志はまさに誓願であり、自分に比べて何倍も宏遠であり、まことに月光菩薩の大きな心と言える。出會って話を交わすと肝膽相照の感を受けた。ちょうど達觀和尚が燕都に滞在中で、このままでは初心を駄目にしてしまうからとて私に事に當たれと言いつけた。私は師の命を心に銘じ清涼山に歸ったが、開兄は燕都に止まり居士達と盟い盛擧の成就を發願した。繼いで私は清涼の地に本據を定めよう

と希望すると、無邊老宿が庵室を提供しようとした。そこで期日を決めて事を占った。思うに、行動に踏み出すには必ず誓願を頼りとして行動の先驅けとするのだ。自分はこれに従事して既に二年ほどになるが、これまで三寶に眞心を傾けて心中を明かしたことがなかった。今、手を清め香を焚き一心に五體投地し、盡虛空徧法界十方三世の佛陀耶・達摩耶・僧伽耶と千華臺上百寶光中の本師釋迦牟尼佛、大智なる文殊師利菩薩・大行なる普賢菩薩・十方三世一切權實護法の諸菩薩に歸命し、そして偈を説いて申し述べよう、……（法本自惟、根器下劣、識習昏柔、幸頼宿縁、得爲佛子。更蒙達觀和尚獎掖、再奮泥途、始知有三藐菩提所當修證。萬曆癸酉、自金陵參雲谷和尚、歸錫武塘、遂構禪室于本所受業蘭若中、朝夕禪誦。時項東源・袁了凡兩居士日過我、爲法喜遊、不以庸調、多諸啓迪、智慈方便、再世淨名、雖象服攸殊、金闍雅契。一曰了凡居士與本失言、欲將梵典翻爲方冊、俾家傳人誦、拔邪見稠林、歸薩婆若海、奈何。弘願雖發、而實行不加。法本竟滯寂山林。居士亦羈迷世網。光陰駒邁、良可惜哉。歲丙戌、豫章密藏開兄、迺持是願、乞檀燕都。蓋念未來衆生、沈沒苦海、預布津梁。其志若願、視法本倍增宏遠。允哉、月光思大之用心乎。一見語及心光照合。時達觀和尚、挂錫燕都、遂囑同事、以謝初心。法本叩命歸清涼。開兄寓燕都、盟諸居士、各發願、以襄盛擧。繼幸卜吉清涼。而無邊老宿且捨庵、建期筮事矣。願遊行海、必假願王、爲之前驅。而法本從事于茲、已二年所、乃未嘗傾誠三寶、以吐寸衷。今盟手焚香、一心五體投地、歸命盡虛空徧法界十方三世佛陀耶・達摩耶・僧伽耶・千華臺上百寶光中本師釋迦牟尼佛・大智文殊師利菩薩・大行普賢菩薩・十方三世一切權實護法諸菩薩、而説偈言、

・・・

上記兩人の願文からすると、方冊形式の大藏經を刻印して佛教を中國の津々浦々すべての人々に廣めて佛教の隆盛を圖ろうとの願いを抱いたのは、萬曆元年（一五七三）、袁了凡が最初であり、話を持ちかけられた幻余法本がそれに賛同したことも間違いない。しかし結局、彼ら兩人はその實現のために果敢な一歩を踏み出さず、却って、山林への志向や世事による束縛を理由に十年もの閒をそのことを忘却に任せていたのである。十年後、袁了凡にかつての思いを再度口にさせたのは紫柏達觀の來訪であるし、十四年後、幻余法本に初志を振起させたのは密藏道開の堅忍不拔の募緣活動に感動したことと紫柏達觀の委囑である。そしてまた、袁了凡が、その事業の世間の人々に對する甚大なる利益を紫柏達觀に強調し、密藏道開と相談して事業推進の具體案を得たことは確かであるが、當初自ら進んで募緣活動の一翼を擔ったわけではなく、しばらくの時を経て具體的活動がようやく軌道に乗った開始した時期に、求めに應じ先行者の驥尾に付して遅まきながらも願文を起草したのである。一方の幻余法本にしても、密藏道開の不借身命なる活動に刺激され紫柏達觀の委囑を受けて専心從事して二年を経たとはいえ、その間、進んで願文を著して自らの初志を積極的の外に示し共鳴し賛同する人々の輪を擴大しようとしたわけではない。根據地を五臺山に移しての刻藏事業がどうか軌道に乗った頃、求めに應じてようやく著された袁了凡の願文を後追いする形で、彼の願文を著したのである。

こうした事情は、袁了凡がたとい最初に方冊藏の刻印を心に願ひ、袁了凡から話を聞いた法本がそれに共感し、また爾後にこの事業の協賛者となり推進者の役割を分擔する者となったとしても、矢張り、彼

ら二人は、この事業の實質的な開始者でもなく主導的な推進者でもなかったことを明らかに物語っている。兩者の願文はそうした事實を正直に吐露している。實質的な創唱者として彼等を持ち上げることががらの實情から些か隔たっていると認められる。

## 一、密藏道開の弘願と活動

上に見た袁了凡と幻余法本の回想に據れば、兩者と關わりをもち、刻藏事業において實質的な推進役を果たしたのは密藏道開であり、精神的な役割を擔ったのは紫柏達觀である。それでは、これら兩人の言動はどのようなものであったであろうか。

先ずは、袁了凡が、嘉興で共に意見を交わしある程度の具體案を得たと言ひ、法本が、その弘願にもとづく募緣活動に感嘆したと言う密藏道開について見なければならぬ。

『刻藏緣起』には道開の文章が三篇收められている。一篇は、「丙戌（十四年、一五八六）二月初五日」と記す「密藏禪師定制校訛書法」、殘る二篇は、「萬曆丙戌（十四年、一五八六）夏四月八日」と記す「募刻大藏文」及び「萬曆丁亥（十五年、一五八七）春正月望」と記す「刻大藏願文」である。いずれも袁了凡と幻余法本の願文が著されるより遙か前、五臺山に本據地を定める以前のものである。これらの中、道開が刻藏事業に關わることにした経緯について語る「刻大藏願文」を先ず取り上げよう。

わたくし道開は剃髮した折り、佛子となったからには佛恩に報いねばならないと知り、日夜その心を露してきたが、佛恩に報いるにはどうすればよいか分からなかった。萬曆壬午（十年、一五八二）の歲、補幢、天臺から武林へと向かう紹興道中、古寺の殘

碑に、「本朝に滅ぼされた前代では、會稽郡の大藏板は凡そ七副であった」とあるのを目にして感泣し、「わづか一郡に存在した板刻でさえこれほどであるから、天下に流通していた大藏經の卷軸は一體どれほどになるのか。それなのに我が明朝では僅かに南・北の兩板に過ぎない。佛教の衰退は茲に極まっている」と考え、そこで「今生の生命が盡きるまで、方冊板を募刻して廣く流通させよう」と誓願した。それから構李すなわち嘉興の地に入って達觀老師に侍從できることになり、また馮開之居士などに面識を得たが、老師は居士達と既にこのことを發願していたので、すぐさま共に訂盟して事に携わった。しかし、多忙の中に三年が過ぎても、事業推進の絲口は見つからなかった。萬曆丙戌（十四年、一五八六）の春に長安に向き、傳金沙居士などと事を圖り繰り返し検討した。かくて「善く事を建てるには、必や先ず本を植てねばならない。本が植てば枝幹卉葉は自然と繁茂するのだ」と肝に銘じた。そこで篤信者十人を定め、毎年それぞれ醗金して唱緣者となり、さらに十人それぞれが三人に勧めて助緣者となつてもらうことにした。募緣活動を分擔すれば布施もしやすく勧誘もしやすく、集合すれば募金額はきわめて多くなり、事業も繼續され、かくて醗金範圍が廣がり、勧誘活動が多くなること、豫測を遙かに超えるはずである。わが風格度量はもとよりこれだけだとしても、諸佛の威光がこれを照覽され、諸善信の願力がこれを支えてくれる。事柄を始める初めとなれば、このやり方を定則とせざるを得ない。居士の各位はこうしてそれぞれ發心し、その誓願をしたため、諸佛に盟い、そして道開に（それら願文を）預けられて、將來に大藏經を完成する證文としましょう。わたくし道開は十人

の居士各位の篤信と弘願によつてこの事業を完遂し佛恩に報いることができましよう。たとい頭目髓腦を碎いて栴檀香を作り、法界すべてに満ちわたらせ十人の居士を供養したとしても、なお願いは盡くし得ません。以上、十人の居士達と共に證します。（道開既雍染、既知、作佛子當報佛恩。蚤夜矢心。顧不知、報佛恩、事當何出。萬曆壬午、從補燴天臺、詣武林、於紹興道中、忽見古寺殘碑、載勝國時、會稽郡大藏板凡七副。因感泣思惟、板刻之在一郡者且爾。其卷軸流通在天下者、當何如哉。迺我明僅南北兩板、法道陵夷、莫此爲甚。遂願畢此生身命、募刻方冊板、廣作流通。尋入構李、得侍達觀老師、兼晤馮開之居士輩、則老師暨諸居士、業已先發是願。即共訂盟從事。遑遑三載、莫得其緒。丙戌春、走長安、籌之傳金沙居士輩、反覆思究。審知、善建事者、必先植本、本植則枝幹卉葉自然叢成。乃定以善信十人、歲各捐貲爲唱緣、又一人則各勸三人爲助緣。蓋分之既易爲施易爲勸、而合之則其資甚裕。又其功爲有繼、至於捐助之廣、勸澆之多、不可思議。格量固自有、諸佛威光臨之、諸善信願力持之、照創事之初、則不得不以是爲定則也。居士等因一一發心、且各疏其願、盟之諸佛、竝歸道開、以爲他日經成之券。道開藉十大士深心弘願、得畢竟是事、以報佛恩、即碎頭目髓腦、作栴檀香、充遍法界、以供十大士、猶爲未盡願、與十大士共證之。）

この回想は、事業推進の責任を擔う道開が十人の居士達と共に佛前で盟約し事業の完遂を誓つた願文の中で述べていることであるから、よもやそのことに嘘偽りはないであろう。

道開が方冊板を募刻して天下に廣く流通させようとの思いを抱いたのは、紫柏達觀に従事してその指導や訓戒を受けてからでは全くない。

まだ達觀に従事する以前、萬曆壬午の歲（十年、一五八二）に補愴、天臺から武林に至る紹興道中、ふと見かけた古寺の殘碑に記された往時この地における大藏經盛行の事情に觸發されたことであつた。その後、旅を續けて恐らくは癸未（十一年、一五八三）に嘉興の地に入つた道開は、恐らくは袁了凡と別れて嘉興に戻つて來ていた紫柏達觀に従事することができ、その影響下にある馮開之居士ほかの檀越達とも面識を持つに及んで、師の紫柏達觀と居士達が既に同じ願いを發していることを知り、共に盟約して事業に携はるることになつたものの、せかせかしている間に三年が過ぎても事業推進の糸口は見出せなかつた、と言ふのである。

ここに、事業に携はつたにもかかわらず「遑遑三載、莫得其緒」であつたといふのは、恐らく、當時道開にはそれより遙かに切迫した事態が別に存在し、その處理に迫られていたからであらう。すなわち『密藏禪師遺稿』の卷後に付され末尾に「皇明萬曆乙酉（一五八五）冬十一月望日沙門道開識」と記す「密藏禪師定制楞嚴寺規約」の前文（新文豐出版『明版嘉興大藏經』二二三—三四頁）によれば、道開は陸光祖の依囑を受けて楞嚴寺の方丈、禪堂、齋厨らを重建する工事の勞務監督の任に當たり、甲申（一五八四）秋七月から乙酉（一五八五）春二月までかかつて禪堂と齋厨の落成にこぎつけたが、その後、馮開之の求めで方丈工事を後回しにして佛殿工事に取りかかつたところ、秀水の陳瓚の逝去を機に不逞の徒輩が興した讒言によつて工事が中斷を餘儀なくされたといふ。恐らくそれらの善後處理に忙殺され、到底、刻印事業に専念できる状況にはなかつたのであらう。

その間、刻印事業を主に推進したのは、達觀周邊の居士達であつた。たとえば袁了凡が「刻藏發願文」に名を擧げる陸光祖、馮夢禎、瞿汝

稷、曾乾亨、王肯堂や「檢經會約」を著している管志道などであらう。「刻藏緣起」に收められた文章中、著作年時が最も古いのは、「萬曆十二年甲申（一五八四）元旦」と記す陸光祖の「募刻大藏經序」であるが、これは袁了凡が「刻藏發願文」で「即命余草募緣文、而請益于吾師五臺先生。」と記しているのに對應する。

ちなみに萬曆十二年甲申元旦に陸光祖が「募刻大藏經序」を著してから萬曆十五年丁亥（一五八七）春正月望日に道開が「刻大藏願文」を著すまでの三年間に著された文書を順に挙げると、「萬曆十二年佛生日」と記す管志道の「檢經會約」、「萬曆十四年丙戌（一五八六）春正月二十七日」と記す馮夢禎の「刻大藏緣起」、間に「同年二月初五日」と記す密藏の「密藏禪師定制校訛書法」を挾んで、「同年春二月望前」と記す管志道の「刻大藏植因疏」、再び「同年夏四月八日」と記す道開の「募刻大藏文」を挾んで、時日は明示しないものの道開の「募刻大藏文」に付されたと思われる達觀真可の「書某禪人募刻大藏卷後」、同じく年時未詳ながらこの時期のものかと推測される王世貞の「刻大藏緣起序」、「萬曆十四年丙戌（一五八六）夏五月五日」と記す傳光宅の「密藏開禪師募刻大藏敘」、「同年季夏望日」と記す陳瓚の「贈幻余密藏唱緣刻大藏敘」、「同年膺月望日」と記す曾乾亨の「刻藏緣述」、「同年膺月圓日」と記す張壽明の「募刻大藏經序」、「同年冬臘後九日」と記す徐琰の「贈幻余密藏二上人唱緣刻大藏敘」、「萬曆十五年丁亥（一五八七）元日」と記す于玉立の「贈幻余密藏二師唱緣刻大藏序」で、これらの中、達觀と道開の文章を除くと、萬曆十二年に著されたものは、陸光祖の文章と管志道の「檢經會約」だけの二篇であり、十三年には一篇も無く、十四年になつてようやく八篇が著され、そして十五年元日に一篇が著されたといふ次第である。

こうした情況からすると、募縁活動が開始されて間もなくの二年間は、一方では陸光祖が著した募縁文に對する世間の反應待ちといった状態であり、もう一方では刻印すべき經典の定本を作るための校定作業を、當初共盟した人々が各自分擔し、且つ全體としての調整確定作業を具體的に進めるといふことであつたらしい。道開も「乙酉（十三年、一五八五）冬十一月望日」と記す「定制楞嚴寺規約」を著しているところからすると、乙酉末には楞嚴寺重建事業の重責からようやく解放され、いよいよ定本作成に向けての校定作業に重心を移すことが出来るようになったらしく、年明け一月後の「丙戌二月初五日」と記す「密藏禪師定制校訛書法」を著している。これは、楞嚴寺重建の第一期事業をとかく成し遂げた道開に對して、有力居士達が大幅な信頼を寄せ、これによって刻藏事業を統括する重責も彼が擔うことになつたことを意味し、共盟した居士達が管志道を中心にそれぞれ分擔して行なつていたそれまでの校定作業が、いまや道開の責任の下で楞嚴寺を中心にして行なうものへと移行しつゝあつたことを示すのであろう。

だが募縁活動が始まって丸二年が過ぎようとする時期になつても、活動の一翼を積極的に擔うべく募金に應じ募縁文を著せようとする共鳴者がなかなか現れなかつたとなると、事業を繼續し進展させる爲には、事態の打開こそが緊急事である。事業推進の實際的責任を委ねられたと自覺する道開が、丙戌（十四年、一五八六）の春、長安に共盟者の一人傳金沙居士を訪れて共に相談することになつたのは、必ずやこのためであろう。傳金沙居士と思案をめぐらした道開は、十人の有力居士を醸金者の中軸に据え、それぞれ三人の協贊者を獲得し、あわせて四十人からなる醸金者組織を構成し毎年醸金を得て經濟的基礎を固めるといふ打開策を見出し、勇躍楞嚴寺に戻り、「夏四月八日」には

「募刻大藏文」<sup>(6)</sup>を著して、この事業においては出家者として初めての募縁を天下に呼びかけることになる。その趣旨を簡條書きで示すならば以下の通りである。

- (1) 衆生は佛法が無ければ迷いに沈み、佛法は流通しなければ隱没する。佛法によってこそ一切衆生はあらゆる幸福を成就し窮極の悟りを實現できる。
- (2) 佛法を流通させる人がいればこそ世界のあらゆる人々はその恵みを受け、すべての時代すべての聖賢も流通させる人を稱贊する。本朝においても既に二度にわたつて皇帝によって敕版が開かれており、大藏經は幾度版行されても差し支へはない。
- (3) 敕版刊行後に、浙江の武林から方冊板が出されたが、歲月と共に板木が損壞してしまひ、二種の敕版も種々の事情から印造が困難で、津々浦々からの切實な要望に應えられない。
- (4) 宋刻本によって二種の敕版を校定すると相互に誤字誤植が歴然としており、教派や時代の違いを超えて一貫する道、聖人の心を流通する必要がある、今上皇帝が從來未收の疏論を大藏經に収録した趣旨に沿つて刻印する。
- (5) 武林の方冊藏が隱没して久しく、重刊は焦眉の急であるから、今、宋本、南北二種の敕版を校定し、廉價な方冊板を刻印することは普及に便利である。
- (6) 求法流通のためにあらゆる艱難辛苦を忍んだ昔人の苦勞を憶えば、當今の募刻活動など何程のこともない。
- (7) 當今の有力居士達はこの企てに贊同し、我々が全土を行脚して募縁活動をすすべての人々に無上の悟りへの道を指し示すことを激勵してくれている。

これらは道開に独自の主張では全くない。それまで居士達によって著された文章を踏まえそれらの内容を整理したものである。しかし、活動開始以來、募縁を求められた人々が陰に陽に問いかけてきた、あるいは豫測される數々の疑難や危惧に對して釋明し、圓滑に所期の目的を遂げたいとの思いがここには明瞭に示されている。

なお、著述年月日は不明ながら、達觀眞可に「書某禪人募刻大藏卷後」という一文がある。その概略は、「自心は即ち我心（正因佛性）であり、我心は佛心（了因佛性）であり、佛心を明かすのは佛語（緣因佛性）であり、佛語とは大藏に他ならない。衆生はもともと佛でありながら、日常それに氣がつかない。自心即ち我心が佛心であり、佛心が我心即ち自心であることに氣づくには、それを明かす大藏によらねばならない。刻藏事業は、單に個人の悟りを開く手だてに止まらず、開物成務を旨とする政治の根幹である」というものである。あきらかに、政治に參畫し補翼することを旨とする在俗有力者達の協贊を得ようとするもので、「書某禪人募刻大藏卷後」と題し、また末尾に「刻大藏之緣始。今某將丐緣於四方。馮太史跋其前。予繼太史而復跋之者。」と記しているところからしても、必ずや、道開の「募刻大藏文」の後ろに達觀が添え書きしたものであろう。

かくして、最初の呼びかけから丸二年が経過すると、ようやく陸光祖以外の人々の手になる募縁文も、一篇、二篇と寄せられるようになり、道開の「募刻大藏文」が著された丙戌四月八日以後にはさらに數を増して、「刻大藏願文」が著された丁亥正月望日までのおよそ九ヶ月の間に、協贊者達から七篇の文章が寄せられるまでになった。しかし、それでも當初の共盟者以外の人となるとその數はきわめて少なく、不惜身命の意氣込みで開始された募縁活動も、共盟者達が當初期待し

たような反應を世の人々には呼び起こさなかつたらしい。あまつさえ、火付け役とも言うべき袁了凡や幻余法本などですら、どうしたわけか、この時期になつても募縁活動の表面に姿を現すことがなかつたのである。

これに加え、寄せられた文章からすると、王世貞、傅光宅、張壽明の三人は、道開一人の名だけを擧げて事業推進の責任者が道開であることを承認しているのに對して、陳瓚、曾乾亨、徐琰、于玉立の四人は、いずれも幻余、密藏という順序で二人の名を列擧して、その文章を目にする人々に、事業推進の責任は主に幻余法本にこそ在り、密藏道開はあくまでも従なる位置を占めるに過ぎないとも理解されるような書きぶりをしているのである。それまでの有力居士達に替わつて道開が禪師として初めて「募刻大藏文」を著し募縁を呼びかけたにも拘わらず、協贊者達がそれを承けて著した七篇の文章で、事業推進の責任者についての理解が必ずしも一致を示さなかつたことは、恐らく呼びかけ人たる道開にとつては豫想外のことではなかつたか。

世の人々のきわめて冷淡な反應と、事業の責任者に關する共盟者間の認識の不一致とは、事業の前途を危惧させるものであろう。既に「募刻大藏文」を著したにもかかわらず、道開が、改めて有力協贊者十名と一堂に會し佛前に誓願共盟し、それぞれが著した願文を捧げ、それらをとりまとめて保存し、事業完成の證券にしようとした背景には、こうした事態が存在していたからであらう。

こうして、萬曆丁亥（十五年、一五八七）春正月望日、有力協贊者十名と佛前に誓願共盟した折り道開が示したのが、既に一瞥した「刻大藏願文」であるが、共盟した協贊者達がその前後に提出した願文は、道開のそうした思いに十分應えるものであつた。『刻藏緣起』に一纏



めにして収録され、その第一面に「手卷は徑山に保存し、別にこの書冊に記録して吳江の周季華居士のところに留めておき、刻藏が完工したら『刻藏緣起』の後に付録とする。誓願の力が深く廣げればきつと腫を接して事業を擔う人々が出てくるはずであり、未完に終わるのではと心配してはならない。道開はここに謹んでしたため、契約書とする。本師和尚は馮開之、繆仲淳の兩居士と證明する。(手卷存之徑山、另錄此策、留吳江周季華居士處、俟藏事告成、附刻藏緣起後、願力深廣、定有繼起肩荷者、無慮其不克終也。道開謹書爲左券、本師和尚同開之仲淳兩居士證明)」と大書した『刻大藏願文』には、道開の「刻大藏願文」に續けて、以下、曾乾亨の「刻大藏願文」、傅光宅の「刻大藏願文」、瞿汝稷の「刻大藏願文」、唐文獻の「刻大藏願文」、曾鳳儀の「刻大藏願文」、徐琰の「刻大藏願文」、于玉立の「刻大藏願文」、吳惟明の「刻大藏願文」を収録している。これらの中、道開、徐琰、于玉立のものには「丁亥正月望日」、唐文獻のものには「丁亥正月穀旦」、吳惟明のものには「丁亥四月六日」と記され、曾乾亨、傅光宅、瞿汝稷、曾鳳儀等のものには年月日が記されていない。ただ、内容から推して、道開のと同じく正月望日のものか、遅れてもやや遅れる程度であろうが、吳惟明のものだけは丸三ヶ月ほど遅れて提出されている。とまれ、これら願文のすべてにおいては、道開こそが事業指導者として承認されて、あるいは單獨で名を挙げられ、あるいは師の達觀と列擧されており、幻余法本の名はまったく挙げられていない。とりわけ、さほど時を隔てぬ以前に著した文章で、刻藏事業推進の責任者として法本、道開の順で兩者の名を列擧していた曾乾亨、徐琰、于玉立の三人が、ここでは道開の名を擧げるだけで、法本の名をまったく擧げていないことは迂闊に見逃せない。十人の有力居士達と一堂に

會し佛前に誓願共盟し願文を取りまとめた道開の目的はほぼ達せられたであろう。

しかし同時に、これまで伏在していた問題が逆に表面化したように窺われる。そもそも募緣活動の先驅けとなった陸光祖の「序」や、やや遅れる管志道の「約」には事業推進者の具體的姓名はまったく見えず、それらに二年程遅れる馮夢禎の「緣起」や管志道の「疏」、そして王世貞の「緣起序」、傅光宅の「敍」には道開の名を擧げるだけであるのに、それより遅れる陳瓚の「敍」、曾乾亨の「緣述」、徐琰の「敍」では法本、道開の順で列擧されるようになり、更に後に著された于玉立の「序」、曾乾亨の「願文」、曾鳳儀の「願文」、唐文獻の「願文」、徐琰の「願文」、于玉立の「願文」、吳惟明の「願文」に至ると、達觀老師への言及や達觀と道開とを列擧するようになるという情況であって、萬曆丁亥(十五年)以後に著されたほとんどの文章において、道開と居士達の共通の師としての達觀への言及が法本への言及に替わって登場してくるのである。

共通の師である達觀の存在に注意を向けること自体はさまで問題ではない。師弟間で食い違いが無ければ、實に麗しい關係である。だが、わずかでも食い違いが生じ始めれば、師匠の意向は陰に陽に弟子の心理的負擔を増大していく。實際、師弟間における食い違いは、道開が「刻大藏願文」を著すわずか半月前の萬曆丁亥(一五八七)元日に于玉立が著した「序」に既に顕在化していたのである。

(幻余・密藏の)一師が發願したとき、自分のもとよりこれに參畫し「衆生の苦惱は到底忍び得ないが、法潤に浸るなら苦難の輪廻を止めることができる。一刹那でも早いほうがよい。しかし據り所無く實現を願っても成功は覺束なく、あまねく募緣をした

のでは成功は遅くなってしまう」と考え、そこで吳の地域の法侶と誓願共盟し、財貨を差し出して早期の成功を圖ろうとした。しばらくして吾が達觀師にお尋ねすると、師はむっとされて「これは最も優れた佛事だ。どうして君達の風格度量などで當たれよう。そもそも一毛一飯などのわずかの布施・供養でもいつまでも崩れないのだ。加えて資財によって法鼓を敲けば、法施と財施は二つながら満足に收められよう。かくしてこそ一塵一塵、一願一力といった微少なるところから一讚歎にまで至れるのだ。そうでなければ、無心に聞きながら有意に誇るといふことになって、たとひ一大藏の教えでも沸き立った波瀾を穩やかにはできない。しかし衆生の心田には既に大いにかのことが具わっているのだから、どうして廣大無邊の佛因によってそんな狭劣な考えなどを起こすのか。すぐにも廣く募縁することに定められよ」と言われた。ああ、私玉立は速成を主張し、吾が師は廣募を主張される。考えは同じなのだろうか。篤信の方々よ、吾が速成の懐いを憐憫し、吾が師の廣募の願いに共感していただくなら、きつと悲愴なる氣持ちで奮い立ち、考え込まず眞心が勤めるままに行う人が出てくるはずである。(方二師起願時、余固籌之、念衆生苦惱、弗復可忍、而沾濡法潤、永息苦輪、得早一刹那爲快。然憑虛實實、蓋難爲功。普於爲緣、則又晚也。遂願盟諸吳中法侶、爲傾貲、亟其成。閒以請之吾達觀師。師喟然爲歎、謂是最勝佛事爾、何得以格量心當之。夫一毛之施、一飯之供、終不壞滅。況以資財振法鼓、則兩施圓收。故於是而或一滴一塵、一願一力、微而至於一讚歎、又不然、以至於無心而聞、有意而誇。即一大藏教、未暢波瀾、而衆生八識田、業已大有是事。奈何以無邊因、作狹劣想乎。則定策廣募。嗚呼、

嘉興大藏經刻印の初期事情

玉立主張速成、吾師主張廣募、是果同耶別耶。善信之士、憐餘所以速成之心、感於吾師所以廣募之願、將必有愴焉而悲烈焉而奮、不入思惟而眞心自勸者。)

既に見たように、十名の有力居士を中核に鑿金者四十人を組織して財政的見通しを得つつ刻印事業を推進するという方策は、天下に漠然と募縁活動を行うだけでははかばかしい反應が得られないという情況の中で、道開が長途長安に出かけて傳金沙居士と相談し、ようやく見出した最善の策である。この方法を採用するについては、最初の募縁文を著した折に刻藏の早期完成を望んだ陸光祖はもちろん、その他老齡の居士達も諸手をあげて歓迎し、于玉立も無論同感であったであろう。にもかかわらず、于玉立がこのことを口にする、達觀は卽座に、有力居士中心のせせこましい考え方だとして、強い難色を示したのである。于玉立の當惑ぶりは文中に見えたとおりだが、恐らく聞もなく師の意向を知った道開も大いに戸惑ったのではなからうか。道開は、それから半月後の誓願共盟の際に著した「刻大藏願文」の末尾で、達觀の「是最勝佛事爾、何得以格量心當之。」という言葉を十分意識しつつ、「格量固自有、諸佛威光臨之、諸善信願力持之、照創事之初、則不得不以是爲定則也」と述べて、決然と既定方針を堅持することを確認している。仁を爲さんとする以上、師にも譲れないというのである。師たる達觀が強調するように、信仰の表出においては眞心こそが肝心であり布施の多寡は二次的であるという原理的立場の堅持は確かに重要であろう。しかし、既に暮年を迎えている共盟者達の切なる祈願を十分に汲んで事業を早急に進捗させる最適の方法を探ることこそが現在の緊要事であり、これこそが事業推進の實際に與かる者の責任ある態度である、というのであらう。于玉立に向けた達觀の批判は

當然ながら道開へも向けられることになったであろう。

### 三、紫柏達觀の意識と役割

刻藏事業が、紫柏達觀自身にとってどれだけ重要であったかは検討すべき問題である。このことに關して彼は二つの發言を遺している。

その一つは、流謫されている憨山徳清を嘆いて口にしたという萬曆庚子（二十八年、一六〇〇）の言葉「佛の正しい教えを伝える人は今やいない。まるで法幢が摧れるのを坐視しているかのようである。ならば三寶を紹隆しようとする者は、どのように心すべきであろうか。憨公がまだ歸還できないでいることは、我が生涯において大きなしこりである。礦税が廢止されないことは、我が救世活動において大きなしこりである。法燈錄をまだ續成できないでいることは、我が佛の慧命にとつて大きなしこりである。もしこの三つのしこりを消滅できなければ、佛がおられる王舎城には決して行くまい。（法門無人矣。若坐視法幢之摧、則紹隆三寶者、當於何處用心耶。老憨不歸、則我出世一大負。礦税不止、則我救世一大負。傳燈未續、則我慧命一大負。若釋此三負、當不復走王舎城矣。」）であり、もう一つは、獄死する直前に遺したとされる言葉「楞嚴寺徑山寺の刻藏のことは、出来るならやればよい。出来なければ止めるのだ。（楞嚴徑山刻藏事、可行則行、不可則止。）」である。これらの言葉を見る限り、達觀には刻藏事業の完成に命を賭けていた様子はない。ただ、これらの發言のいづれも、道開が隱遁し、法本も逝去した後のものであり、かつ肝膽相照らす仲であった法友徳清とも別離して悲嘆の情押さえがたい状況でのものであるから、これらを以て、達觀の刻藏事業に對する當初の心構えまでも云々することは酷に過ぎるかも知れない。道開や法本がまだ健在で、

彼らに刻藏事業推進を期待していた時期では、達觀の心情は、また別のものであつたらう。

既に見たように、達觀は、袁了凡の所懐に同感し、それを門下の居士達に傳えて共に刻藏への願いを抱き、道開の参加を待つて實質的活動を開始していたのであるが、彼自身は必ずしも募刻活動の實際にかかわることは少なく、當初は、わずかに、道開を激勵したり法本に依囑するとか、居士陸光祖の「序」に呼應して「書某禪人募刻大藏卷後」なる一文を著し、恐らくは道開の「募刻大藏文」の末尾に付して支援するとか、于玉立の問いかけに對して自己の意見を表明したりするなどの間接的役割に徹していたらしい。

ところが、事業の本據が五臺山に移り、活動が徐々に軌道に乗つてきた萬曆己丑（十七年、一五八九）の秋七月八日、周圍に求められてか自主的にかはともかく、達觀は「募刻大藏疏」を著し、その意向を直接自らの言葉で天下に表明する。文中、事業推進に關わるものとして、末尾近くの文章が注目される。

かくして吾が徒の道開と法本とは下愚をも顧みず、徳意菩薩に思いを馳せ、經律論の全藏を刻印しようと誓い、佛法僧の至恩に報いようと願つた。微かな力なので満願は困難だが、勝れた事なので募縁は廣くなければならぬ。十函であれ五函であれ縁の多寡によつて刻印し、一部であれ二部であれ意に沿つて完成を喜ぶ。大地の慈雲、普天の甘露である。わずか一字の功德でも、限りなく贊揚され、ほんの半偈がもたらす利益も、想像できないほどである。（用是吾徒道開・法本、不揆下愚、遠追徳意、誓刻經律論之全藏、願報佛法僧之至恩。力微而滿願爲艱、事勝而資檀須普。或十函五函、量縁而裏刻、或一部兩部、隨意而樂成。大地慈雲、

普天甘露。一字之功、贊揚之莫盡、半偈之益、思議之難窮。」

ここではなお自分が中核であるとは言わず、道開と法本とを主なる發願者としているが、しかし、五臺山移轉に當たつて裏方として下準備に奔走した法本の努力を賞揚しようというのであろうか、道開、法本の順に名を擧げるとはいえ、誓願における兩者の決意と實踐をほぼ同様であると位置づけ、事業推進における道開の位置を相對的に下げており、また、恐らくは募縁狀況の變化もあつてか、先に于玉立に個人的に示していた廣募方式こそが當今必須の方法であると明言して、有力居士達の贊意を得て道開が推し進めている既定の募縁方式に否定的な考えであることを明らかにしている。また、既に見た「書某禪人募刻大藏卷後」でと同様、ここでも、道開と法本とが全藏の刻印を誓つたとはいながら、梵策形式から方冊形式に變えようとしたことについては全く觸れていない。

さらに、達觀には「募刻大藏疏」の他に「刻藏緣起」と題する一文がある。年月日を缺いたこの文章は、憨山德清閣『紫柏老人集』の卷七冒頭には収録されているが、元來の『刻藏緣起』には収録されず、民國二十一年支那内學院刊『(新編)刻藏緣起』が付録としているものである。この文章で注意されることは、先行研究が既に觸れるように、文中に記された事柄の繫年が哀了凡の「刻藏發願文」や法本の「幻余大師發願文」と食い違つてゐることだが、それにもまして見逃せないことは、道開の「刻大藏願文」とは方冊版の採用の經緯に關する認識において全く異なつてゐることで、讀む者を大いに當惑させる。便宜、道開に關説する部分だけを以下に摘録する。

密藏開公が自分に問法するようになってから、刻藏の事を委囑したところ、開公は「梵策を方冊に變えたのでは、人々は尊重し

なくなりません。好くないのではありませんか」と難色を示したので、自分はこれを破斥して「金玉は尊重されても、生命を維持するには役立つ。米麥は金玉が尊重されるには及ばないが、生命を養うことができる。たとい梵策が尊重されてもその意味が理解されなければ、尊重したとてなんの利益があろう。たとい方冊が尊重されないでも、廉價と造りやすさで流通させれば、必ずや誰にも何處にも廣まるだろう。どうして教えの趣旨を解るものがほとんどいないなどということがあろうか。わしはこうも聞いている。我が法は毒を塗つた鼓のようなもので、衆人の中で撃つて音を出せば、有心の者も無心の者も、聞けば命が斷たれてしまふ。もしそうなら、尊重し供養する者に大きな功德があるだけでなく、たとい毀損したり誹謗する連中でも結局利益を受けるのだ。いったい娑婆で悟りへ向かうには、邪見を破折するのが先で、包攝するのはその次だ。たとい方冊版を輕賤する連中を先ず地獄に墮して極大なる苦しみを受けさせても、苦しめば本に反るのであり、本に反れば地獄に墮ちた原因が分かり、原因が分かれば、過ちを改め、過を改めれば輕賤するのを變えて尊重する。こうして包攝し、駄目なら破折する。破折すれば地獄があることが分かり、地獄を見てしまえば天堂を切に想うようになり、天堂を信ずること佛を信ずるのだ。だから、尊重するのと輕賤するのは、掌を返すようなもの。わしは、一切衆生が佛法を輕賤して地獄に墮ち、地獄の苦しみによつて菩提心を發するようと、ひたすら願つている。もしそうなら、梵策を變えて方冊にするのは、まさに佛の廣長舌相であり、いかにも殊勝なること萬萬倍だ。君はどうしてそんなに愚かなのか」と叱つた。道開は自分の言葉を聞く

と泣いて涙を流し跪いて誓を立て「謹んで和尚の命を承ります。もし三萬金を喜捨してこの藏版を刻印してくれる人が出て参りましたら、わたくし道開はわが頭目腦髓によってこの人を供養することを誓願します。今後、藏版が完成しない中は、吾が心は絶對死なないと誓います」と言った。これから分かるように、法本・道開・そして不才なる自分と現前の一切の刻藏の施主とは、みな袁汾湖の化身なのだ。(及密藏開公問法於老漢。因而囑以刻藏之事。開公曰、易梵筴爲方冊、則不尊重、無乃不可乎。予破之曰、金玉尊重、則不可以資生。米麥雖不如金玉之尊重、然可以養生。使梵筴雖尊重、而不解其意、則尊之何益。使方冊雖不尊重、以價輕易造、流之必溥于萬普之中、豈無一二人解其義趣者乎。我又聞之。我法如塗毒鼓、於家人中擊之發聲、無論有心無心、聞之者命根斷。若然者、不惟尊重供養者有大功德、即毀之謗之之徒、終必獲益。且娑婆度生、以折門爲先、攝門次之。縱使輕賤方冊之輩、先墮地獄、受極大苦。苦則反本、反本即知墮地獄之因。知因則改過。改過則易輕賤爲尊重。是以攝之、不可則折之。以折之之故、則見有地獄。既見地獄、則痛想天堂矣。由信天堂而信佛、故尊重與輕賤、乃翻手覆手耳。老漢但願、一切衆生輕賤佛法、墮地獄中、因地獄苦、發菩提心。若然者、易梵筴爲方冊、則廣長舌相、猶殊勝萬萬倍矣。子何不智若此乎。於是道開聞予言泣涕俱下。跪而發誓曰、謹奉和尚命、若有人舍三萬金、刻此藏版者、道開願以頭目腦髓、供養是人、自今而後、藏版不完、開心不死。由是觀之、則法本・道開・不才老漢・及現前一切刻藏施主、皆袁汾湖之化身也。)

既に道開は、方冊藏の募刻を志したのは、達觀に侍従する以前のこ

とであり、侍従してから達觀とその門下の居士達が同じ思いであるのを知って共盟し従事した、と記しているのに、達觀は、道開が達觀に侍従してから、方冊藏は佛典を輕賤することになると反對する道開の心得違いを糾問し反省させた、と記しているのである。また、袁了凡と法本とが共に事業における自らの功績は道開に比べられないと記しているのに、達觀は、袁了凡こそが中心であり、自分も含め道開も法本も了凡の代役に過ぎないと記しているのである。

表面上、事業關係者すべてに對し、袁了凡の誓願を體して佛行に邁進しよう、と呼びかける此の文章を著した達觀の眞の配慮がどこにあるかを憶測するなどは不遜と言うべきであろう。だが『紫柏老人集』卷三に「示黑白諸弟子」と注される「法語」があり、文中「そもそも禮は身體の根幹である。根幹が端正でなければ、その他がどれほど具備してもどうして評價できよう。・・密藏はわしにいかにも懇ろに仕えてくれるが、それでも名分や紀綱に觸れ、はじめを守らないことが多い。その他は言わずもがなだ。仲尼は「必ずや名を正さんか」と言っているが、きつと、名が正しくなければ分が定まらず、分が定まらなければ禮が立たないのだ。人でありながら禮を忽せにするなどどうしてできよう。まして佛弟子でありながら端正でないのでは、出家の格好をしたとて何になろうぞ。(夫禮者身之幹也、幹而不端、其餘雖多、惡足道哉。・密藏侍吾至勤、但觸名分紀綱、猶多汗漫。況其他耶。仲尼曰必也正名乎。蓋名不正則分不定、分不定則禮不可立、人而忽禮尙弗敢。況爲佛弟子而不端、此則剝染奚爲)」という言葉が見えていくところからすると、あるいは、達觀の目には、道開の言動には師弟の間をわきまえぬ傲慢のかけりが滲んできており、彼の心情を十分に付度しないどころか明瞭な意思さえも居士達の支持と現狀の打開とを

盾に拒絶するかのごとく見える以上、機會を捉えて反省を促し、事業推進において、名分・紀綱をわきまさせなければならぬと考へられたとしても無理ではなからう。

事實そうなたかどうかは分からないが、道開の「刻大藏願文」を既に目にし、いま改めて師達觀の「刻藏緣起」を目にする者は、十名の有力居士達と佛前に共盟し「刻大藏願文」を著した道開の誠實さに深い疑惑の目を向け、彼の裁量と手腕に任せることを大いに躊躇するようになったに違いない。と同時に、元來淺薄で頑迷固陋な道開の謬見を論破して刻藏事業に邁進させている達觀に對して、卓越した指導者としての崇敬の念をいや増すであろう。さらに、文章の最後で、道開や法本、自分やすべての募緣者達にしろ、いずれも袁了凡の化身に過ぎず、袁了凡こそがまさしく報身であるとして、刻藏事業の眞の主体をあくまでも居士袁了凡に認めようとする達觀の言葉を目にするに及んで、その限りなき謙讓の態度に、文字通り徳識兼ね具わつた宗教的指導者の心態を認めて心服するであらう。

五臺山に本據を構えてようやく軌道に乗つたかに見えた刻藏事業は、募緣活動の不調に加えて、事業擔當者や支持者達と宗教指導者との間に募緣方法をめぐつて生じた心理的軋轢、それを因由とする事業擔當者の統率力の減退という豫想もしなかつた危機を孕むことになつたのではないかと推測される。

## むすび

限られた人々だけの手で途方もない難事業を推進し一定期間内に完遂するには、たとい多くの人々がそれに共鳴し贊助するだけでは十分だろう。すぐれた統率者が必要であり、その下での強固な結束とそ

の繼續とが求められる。宗教的權威者による原理的立場の唱導も重要な作用を果たすであろうが、しかし、原理を踏まえつつも現實に立脚した實際的方策の採用こそが肝心であろう。宗教的情熱に支えられた嘉興藏の刻印事業は、當初、募緣者の數が期待をはるかに下回つたと、統率者を誰とするかについての關係者間の共通認識が必ずしも存在せざつた動搖したこと、宗教的指導者としての師が實務擔當者にあくまでも弟子としての服従を求め折に觸れてその態度を批判したこと、師弟間に募緣方法における原理論と現實論との對立があつたこと、更に又、事業の據點が江南、五臺山、江南と屢々移動したことなど、各種困難な事情を抱え込んでいたのである。事業開始後既に十五年以上も経ち、事業推進に當つた道開が隱遁し後を繼いだ法本も病没した萬曆二十年代後半に至つてさえ、當初目的の半分すらも實現できなかったのは、いわば當然のことだったのである。

## 注

(1) 管見に依れば、『刻藏緣起』の版本には、『嘉興大藏經』首函に收められる『刻藏大緣起』(未見)、恐らくはそれに訓點を付した和刻本『刻藏緣起』という系統、刊記に「民國八年己未臘月八日揚州藏經院識」と明示する『刻藏緣起』の系統、「民國二十一年八月支那內學院識」と明示する『刻藏緣起』(新製)の系統があり、その體裁、收録内容、收録順序にはかなりの違いがあり、對照比較する必要がある。詳細は拙編『刻藏緣起三種版本の同異と所收文書の整理』(特定研究「明萬曆嘉興藏の出版とその影響」研究成果報告、平成一七年三月)を参照。

(2) 昭和三九年一月三日發行の大藏會編『大藏經—成立と變遷—』には、方冊本大藏經出版は袁了凡居士の發意で幻余法本にそれを強調した。こ

れに賛成したのは密藏道開と陸光祖、馮夢禎の二大居士で、紫柏達觀は道開と共に愍山德清を訪れ支援を得た(八〇頁)と見える。民國八一年(一九一九)七月二五日出版の藍吉富著『嘉興大藏經研究』には、刻藏事業の建議と方冊形式の創唱者は袁了凡で、袁了凡が幻余に影響を與え、兩人が紫柏と相談して同意を得、加えて既に刻藏を發願して紫柏の下にいた道開がこれに終んで相互に關係し合い事業を始めるに至った(六〇頁)と見える。二〇〇三年一月出版の李富華・何梅共著『漢文大藏經研究』第十章關於嘉興藏的研究には、嘉興藏募刻事業は萬曆元年前後に袁了凡と幻余法本とが創議し、萬曆十年頃達觀の絶大なる支持と道開への委囑とによって正式に始められることになった(四七二頁)と見える。なお藍吉富『嘉興大藏經研究』は、この研究に着手當時、筆者が未見であることを察知された荒木見悟先生が野口善敬氏を通してわざわざコピーを送って下さったものである。

(3) 馮夢禎、管志道、王世貞、張壽明、汪道昆、愍山德清の序・緣起、願文などの叙述から、彼等がそれまでの文章を示された上で文章の執筆を求められていたことは確實である。

(4) 五臺山への移轉を、「刻藏年表」では萬曆十七年(一五八九)に繋げる。沈自邠「贈密藏開公之五臺刻大藏序」もそれを裏書きする。

(5) 管志道「檢經會約」参照。なお道開の「定制校訛書法」はこの「約」の中から校勘方法だけを抜き出して簡略化したものである。萬曆二九年ごろのものかと思われる「刻藏凡例」は大藏經の構成と順序次第についての考え方を明示した後、道開の「定制校訛書法」の大筋を取り込んだ條文を並べている。

(6) 全文を提示すべきであるが紙幅の都合で遺憾ながら割愛する。

(7) これについては藍吉富『嘉興大藏經研究』七五、七六頁に既に詳しい指摘がある。

(8) 愍山德清と紫柏達觀の友情については拙稿「愍山德清と方冊藏經」

『東アジア出版文化研究こはく』二〇〇四年二月、もしくは『曹溪禪研究(二)』所収二〇〇三年一〇月)参照。

(9) 愍山德清が著した「達觀大師塔銘」に、當初儀曹郎の吳用先が參禪の折、吳用先には刻藏との大因縁があると勸奨した、と記す。

(10) 愍山德清の「刻方策藏經序」などによれば、丙戌(一五八六)の歲、達觀は道開と共に德清を東海に訪れて事業への協賛援助を求めているが、その後一人で西遊したという。

(11) 全文を提示すべきであるが紙幅の都合で遺憾ながら摘録に止める。

(12) 王肯堂「刻大藏願文」には、戊子(一五八八)から一三年目に於いても全藏の半分すらできないでいる、とある。

本小論は、平成一三年度から一六年度まで交付された科學研究費補助金による研究「明萬曆嘉興藏の出版とその影響」の研究成果の一部である。原稿提出に際し、閲讀に当たられた松村巧氏から懇切なご批評を頂いた。感謝申し上げます。尚、研究期間における研究成果の概要は、「平成一三至一六年度科學研究費補助金研究成果報告」(課題番號一三〇二二一〇一、研究課題「明萬曆嘉興藏の出版とその影響」)二〇〇五年三月に示した通りである。